

〈第34回学会大会(立教大学)基調講演〉

始動した21世紀において学会に求められる役割

袁 茂 寿太郎*

New Role Necessity for Academic Society in ongoing 21st Century

Toshitaro MINOMO*

ご紹介いただきました東京農業大学の袁茂でございます。激動期の学会をどうするかという重要な議論を皆さんで進められるに先立ち、基調講演の機会を頂きましたことに厚くお礼を申し上げます。かつ、その責任の重さに緊張しつつ、私の経験等を踏まえてお話しさせていただきたく存じます。私もこの学会の会員ではございますが、あまり熱心に学会活動をしていません。しかし会誌等を通じて、おおよそこの学会の動きは把握しているつもりであります。話の途中で失礼等がありましたらお許し願いたいと存じます。

1. 学会の創設から現在まで～学会のDNAとは何か？

さて、学会とは「同じ分野の学術〈専門の学問(基礎から積み重ねられた、体系的な専門知識)〉上の研究団体」だとされていて、日本学術会議編「学会名鑑・2001～03版」によりますと、わが国初の学会は、明治5(1872)年創設のアジア協会のようなのです。その後、大正初期までは年に1学会が誕生するテンポで、昭和25年以降、平均して一年間に30～40学会が誕生するという学会隆盛時代が昭和40年ごろまで進みました。しかし、大学紛争時(昭和41年～46年)に学会設立は大きく減少し、47年ごろから復活して第二期の隆盛期を迎えました。しかし、バブル崩壊で増加傾向に歯止めがかかり、現在は1624の学会があるそうです。その1624

の学会の一つがこの日本レジャー・レクリエーション学会です。

この学会に限らず、他のいくつかの学会についても言えることですが、設立当初の理念や使命は不変ではなく、変化することが時代の進行に応じてあるわけです。ここで重要なのは、この変化が、進化の方向であるのか、退化の方向であるのかであります。私がここであらためて紹介するまでもありませんが、この学会は、昭和39(1964)年にレクリエーション研究懇談会としてスタートしています。翌、昭和40(1965)年には、日本レクリエーション研究会となり学会の形式となり、昭和46(1971)年に日本レクリエーション学会設立となりました。そして、平成3(1991)年に日本レジャー・レクリエーション学会に改称したわけですが、この間



基調講演風景

*東京農業大学地域環境科学部教授・大学改革担当副学長
Vice President (on University Innovation), Tokyo University of Agriculture

の昭和62(1987)年に、「レクリエーション学の方法」を編集発行しています。実は、その中に「レクリエーション学は、いまだ十分に体系化されていない。21世紀のキーワードはレクリエーションである」と記述されています。したがって、1988年の大会シンポジウムのテーマは、「レクリエーション研究の今日的課題」となっているわけであります。1995年「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み1964-1995」を刊行していますが、これは、単なる歴史の記録ではなく、組織としての自己点検・評価であったわけですから、つまり、学会に限らずあらゆる組織についていえることですが、組織が活力を維持したままで存続するためには、フィードバックに強い存在でなければなりません。このために、常に自己点検・評価を怠らないことです。ややもすると安易な相互承認型に陥る危険が学会という組織には潜んでいるということをもっと自覚すべきだと考えます。

2. 進化のためには改革とビジョンが必要

ある程度の長い歴史を歩んだ学会が、健全に運営され、かつ社会に貢献する存在であり続けるためには、改革が不可欠であります。改革は決して好き好んで行うものではありません。方向を変えないと存続し得ない状況だから、ハンドルを切る改革となるわけです。ハンドルを切るときはスピードが無いと切れませんので、そのスピード役となるのが、改革にとってのビジョンなのです。そこで、「ビジョンと改革」なのか「改革とビジョン」なのかについて考えてみたいと思います。

私の見解は、「ビジョンを実施するための改革」が一つは議論されてよいと思っています。この場合は、トップダウン的改革であり、ガバナンスの問題が重要となります。言い換えるなら、こちらでは、優れた企画構想能力と強力なリーダーの存在が前提となります。もう一つは、「改革を実行するためのビジョン」が想定されます。こちらは、ボトムアップ的ビジョンであり、関係者がこぞって共有化の努力をするなかで、可能なところから一つ一つ改革を進めていくという方向です。いずれにしろ、改革にはビジョンが必要だということです。

3. ビジョン策定のポイント

では、ビジョン策定のポイントは、どのような点にあるのでしょうか。私は、ニーズとシーズの相互関係

にあると思っています。何を社会が求めているか、学会の役割は何か、の問いかけに着目することがひとつのポイントであります。そして、一方では、改革の母体である組織等に、どのような種があるか、つまり資源や資産や個性・アイデンティティがあるかの分析です。前者では、時代にあったニーズの認識が重要ですので、現状認識と将来予測をするわけです。過去・現在・未来の構図を持ち、ここでは、「振り返れば未来」という思考体系も必要だと思います。後者では、自らの組織のシーズの発掘に努めることです。大きく分けると、人的シーズと物的シーズがあると思いますが、学会の場合はほとんどすべてが、人的シーズということになりましょう。流動的な人的シーズは、不安定なものです。これを持続的にどう資源化していくかが問われるわけです。学会人事の若返り化などはこのことです。

4. 改革の戦略

つぎにお伝えしたいのは、『改革』というものの性格です。私は、常に二重性的宿命をもつのが「改革だ」と認識しています。改革にひたすら抵抗して生命力を失うか、安易に迎合して本質をなくすか、を常に問わなければなりません。いわゆる抵抗勢力があることは、ごく自然なことです。また当事者意識をなくして、蚊帳の外から眺める人がいることも承知して改革路線は議論せざるを得ないということです。しかし、この両者をできるだけ「議論の内輪」に取り込む努力をしないと、完成度の高い改革は実現しません。そこで、その具体的方策が求められるわけです。私が経験している改革では、シナジー効果を伴った改革を目標としています。つまり、ある一つの改革が、いくつかの問題を解決するというシナリオづくりです。換言するなら、一つの改革が複数の効果を生むというシナリオです。ある一つの改革での当事者は少数に限られています。複数になることで当事者の数は増えます。少ない数の当事者では、分化・分析的ですが、多数当事者の議論となると、総合・統合的議論をせざるを得なくなるからです。そのようなベクトルで改革の戦略を構想するのは如何でしょうか。

5. 学会ビジョンと学会改革の基本

このあと、後半で、少し具体的な話をしていきたい

と思います。学会ビジョンと改革は、「変化への対応」が基本となります。取り巻く変化とは何か、対応とは何か、を一つ一つあぶり出す作業を誰かがしなくてはなりません。レジャーやレクリエーションそのものの変化はもとより、それを取り巻く環境の変化を丹念に紐解く努力が必要だと思えます。私は、これ自体大変重要な研究テーマになると思えます。いわゆる学会の仕事は、事務的ボランティアで片付けられる傾向がありますが、そうではなく、研究的視点で取り組む姿勢や体制づくりが肝要だと思えます。また、もう一つの基本は、「将来展望の持続的共有」であると思えます。私たちは、近隣の学会の運営を参考にすることがよくあります。皆さん複数の学会に所属していますので、常に複数の学会情報を目にしています。この経験の中で、最も深く関与している学会の日々の改革にあたり、「ああしたら、こうしたい」を主張するわけです。しかし、個々の学会は、会員数も違えば事務局体制も異なるわけで一様ではありません。そこで可能なのは、「個性ある学会の個性ある活動」を探ることなのではないでしょうか。したがって、総花的活動ではなく、個性ある活動の一つでも持つという方針も一考だと思えます。

6. 情報化社会の学会改革

例えば、現代は高度情報化社会です。情報を取り巻く環境が大きく変化しつつあることを踏まえた学会改革が求められています。季刊誌や月刊誌の情報から、デイリー、タイムリーな情報を提供すべきとの議論もありましょう。会員への情報配信に限るのではなく、個性あふれる学会情報を広く会員以外の外部へ発信することも使命となりつつあります。現在は、日本語による日本人のための学会情報ですが、日本の状況を国際語を通じた日本発信のものとして提供することも考えなければなりません。つまり学問の国際化を目指すということです。日本の状況を伝えることで、海外の類似の情報を得ることができるようになるわけです。環境時代を加味して考えるなら、紙媒体の雑誌から資源の効率化につながるインターネットの情報に変えるのも一つだと思えます。

7. 自己実現社会の学会改革

また、人間の価値意識の変化が急速に進んでいます。

マズローの図式でいきますと、所属意識社会や尊敬社会を超えた、自己実現の日本社会が到来しています。本学会の場合、大学研究者、大学院生、公務員研究者、民間研究者などで組織されています。詳細な分析はできていませんが、学会構成員の構造変化が起きてきているようにも感じます。教育・研究社会に埋没する学会から、社会貢献・人材育成社会の学会へ大きく転換する時期かもしれません。この学会に限らず、全体的に、人材養成機関(大学等)と連動した人材育成の学会がこれからの方向であるように思えます。そのためには、CPD(継続的専門能力開発)社会における学会の役割をシミュレーションするのを感じます。

8. 分化から総合化に向かう学問

さらに、肝心の学問の変化も見えてきています。明治以降の日本社会における文明の進歩によって、学問は次第に分化されてきましたが、再び総合化に向かっているのが現状です。学問の分化による進化を求めるのみではなく、総合化による進化の道を歩み始めたと言って良いでしょう。学際的研究が流行となり、科学研究費に境界領域分野が登場していることが、この傾向を如実に表しています。私は、研究を先端的研究、前線的研究、教育的研究に分類して研究戦略を構想することが一案だとしていますが、レジャー・レクリエーション学会の場合、現場の最前線で使える前線的研究を育てる意識をより強く持ち、そのための支援を強化すべきだと思います。なぜなら、これこそが本学会の個性だと思うからです。

9. 学会の将来はみんなでデザインするもの

最後に、「学会の将来はみんなでデザインするものだ」という主張をして、講演を閉めたいと思います。常に学会では、「私はこう構想する。あなたはどうか計画する。あなたたちはどうか設計する」の会話があつてしかるべきだと思います。全ての会員が、基本構想を描き、基本計画を持ち、基本設計に移す意気込みが必要です。それらを集約できるメンバーが理事となって、実施設計を確立するのが、理事会の役割で、設計監理を怠らない使命を持つのが常任理事会などではないのでしょうか。この後のシンポジウムで、そうした議論がなされることをご祈念申し上げ、終りにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。